

-資料-

地域高齢者への死生観インタビューによる 2年課程定時制に通う看護学生の高齢者の死生観の理解と活用

Understanding and Utilization of the perception on life and death of elderly through
the interviews by nursing students attending the two-year part time course

加藤さゆり¹⁾*・横島啓子²⁾・徳重あつ子²⁾・久山かおる²⁾

要 旨

目的は、2年課程定時制に通う看護学生が、地域高齢者に対する死生観インタビューを通して、高齢者の死生観をどう理解し、死生観インタビューで得た学びをどう活用するのかを明らかにし、後の臨地実習にどう役立てるのかについて考察することである。

死生観インタビュー前の学生の死生観アンケート、死生観インタビュー後に提出したグループの学びレポートを分析した質的記述的研究である。

2年課程定時制看護学生は、地域高齢者への死生観インタビューを通して、高齢者の【生に対する価値観】と【死に対する価値観】を理解した。また、学生は地域高齢者への死生観インタビューで得た学びを《自己の死生観の深まり》《人生の目的や目標》《人とのつながり》など自己の【死生観の深化に活用】することや《高齢者の理解》《死生観に対するアセスメントの実際》など【臨地実習に活用】することが本研究で示唆された。

キーワード：2年課程定時制看護学生、地域高齢者、死生観、インタビュー、討議

I. はじめに

わが国の2017年の死亡者数は134万人を超え、2025年には160万人に達する見込みである。このように多死社会を迎える中、人口および疾病構造の変化に応じた適切な医療提供体制の整備が喫緊の課題である。またその変化に伴い、看護職者の就業場所が在宅や施設等へ広がる為、多様な場での患者の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が看護職者には求められる(厚生労働省,2018)。現在の基礎教育は急性期の看護が中心であり、人生の終末期や在宅、介護施設における看護の学びが少ない。その為、終末期をどう生きたいかといった患者の希望を受け止められるような看護の学びが必要である(厚生労働省,2018)。このような状況にあり、看護基礎教育としての死生観教育は今後さらに重要性を増す。将来、多様化する看護場面で、対象者の生と死について倫理的な判断や

対応ができるよう、学生の中から自己の死生観を考える教育内容が必要と思われる。

これまでも死生観教育に関する研究は多く行われてきた。瀬川,原(2005)、岡本,石井(2005)、早坂(2012)、古川,岡崎(2013)、梅田,迫田(2014)の臨地実習での体験やカンファレンス、死別体験、終末期看護の授業などで死について考えたことのある経験が死生観に影響するという報告や、寺門,大塚,石松,平川(2002)、木下,竹元,齊田,渡邊,牧(2013)の看護学生が自分の家族に対して人生観や死についてインタビューし、いずれもその人の理解や死生観の理解に繋がったとする報告、さらに、石田順子,石田和子,神田(2007)の看護学生の死生観には宗教、性格型、読書や映画鑑賞を通して死を考えた経験および人生に目的意識を持つことが影響し、YG性格検査で内向型の学生に比べ活動的で情緒が安定している外向型の方が目

受付日：2018年9月4日 受理日：2018年12月4日

所 属 1) 武庫川女子大学大学院 看護学研究所 博士後期課程、2) 武庫川女子大学看護学部

連絡先 *E-mail : mw639049@mukogawa-u.ac.jp

的意識は高く死の恐怖・不安が低いという報告がある。また看護学生の学年比較では、狩谷、渡會丹 (2011) の死への恐怖は 4 年次生が低く、臨地実習での経験が死について肯定的に受け止めたとする報告、原 (2015) の学年が進むにつれ、特に終末期実習を終了した学生は自分の死を想像できるようになっているという報告がある。さらに VTR や映画など動画教材を活用した研究では、粉川 (2013) の NHK 放映の VTR 「ある少女の選択～“延命”生と死のはざままで～」を視聴後の学生レポートを質的分析し、改めて生と死について見つめ直すことの重要性に気づいたという報告、眞鍋、天谷、陳、山下 (2017) の死に関するドキュメンタリー映画「いきたひ～家族で看取る～」の視聴前後において、看護学生と社会人に死生観尺度を用いて調査し、看護学生の平均値が視聴後有意に高くなったという報告がある。以上のように、看護学生を対象にした死生観研究の多くは、死生観が影響を受けた要因を明らかにした報告が多く、またその対象は看護大学生や 3 年課程看護学生であった。

2 年課程定時制看護専門学校は、准看護師の資格取得者が医療機関等で働きながら 3 年間就業し、看護師国家試験受験資格を目指す課程である。2 年課程定時制の看護学生を対象にしたこれまでの研究は、学習環境や就労に関することが多かった。例えば、鎌田、松田、山下 (2013) の学習経験や准看護師としての就労経験など、多様な学生のレディネスに対して学習資源の査定的重要性を報告した研究がある。また、小川、上田、森田 (2017) の 2 年課程の教育制度の歴史的変遷と教育的課題についての文献研究で、学生の年齢の幅が拡がり、大学を卒業した社会人経験者が入学してくるなど、学生の高学歴化に伴って学び方、生活の考え方、生き方の意識、思考など多種多様になってきているという報告もある。このように、2 年課程定時制の教育課程における諸問題に研究の焦点が向けられていたように思われる。

本研究の対象は、2 年課程定時制看護専門学校に在籍する学生である。対象校では、授業を通し高齢者の人生の歴史、価値観、死生観を理解する必要性を教授している。しかし学生は、臨地実習で受け持つ高齢患者の価値観等のアセスメントをする際、相手の心情を察するがゆえに生死を扱う話題には躊躇し、教員に指導を求

めてくることが多い。その為、学生が自己の死生観を見つめることや、患者の死生観を理解する為の対話方法の習得が重要だと考えられる。

対象校では過去 4 年間、地域老年看護学実習の一環で、学生が地域高齢者に対して人生観や健康観のインタビューを実施している。そこで今回、地域高齢者に対し死生観インタビューを行うことで、学生が自己の死生観を見つめる機会になると考えたこと、また、学生と地域高齢者の死生観を比較しながら考えることで、高齢者の死生観の理解が深まり、後の臨地実習に役立てることができるのではないかと考えた。

以上を踏まえ本研究では、2 年課程定時制の看護学生が、地域高齢者に対する死生観インタビューを通して、高齢者の死生観をどう理解し、死生観インタビューで得た学びをどう活用するのかを明らかにし、後の臨地実習にどう役立てるのかについて考察する。これまで、2 年課程定時制の看護学生が地域高齢者への死生観インタビューを通して得た学びをどう活用するかといった報告はない。本研究の意義は、学生のレディネスが多様化する 2 年課程定時制看護学生に対する死生観教育について示唆を得られることだと考える。

II. 用語の定義

死生観とは、死ぬことと生きること (奥山益朗, 1997)。ここでは、生と死についての考え方であり、生き方や死に方についての自己の考えや価値観とする。

III. 目的

2 年課程定時制に通う看護学生が、地域高齢者に対する死生観インタビューを通して、高齢者の死生観をどう理解し、死生観インタビューで得た学びをどう活用するのかを明らかにし、後の臨地実習にどう役立てるのかについて考察する。

IV. 方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究対象者

1) 対象学生の特性と属性

2 年課程定時制 (3 年コース) 看護専門学校の 3 年生 14 名 (男子 2 名、女子 12 名) で、年齢は 22 歳から 33 歳 (平均年齢 26.46 歳) である。

13 名は入学当初より急性期総合病院、精神科単科病院、慢性期・回復期病院などの医療機関で、午前または午前と夜間に就労しながら学んでいる。未就労の 1 名は、2 年次終了まで急性期総合病院で就労していた。

3. 研究協力者

要介護認定は受けておらず自立した日常生活を送る地域高齢者 4 名である。内訳は男性 3 名 (60 歳代後半から 70 歳代後半)、女性 1 名 (80 歳代前半) で市社会福祉協議会担当者から紹介を受けた。高齢者はそれぞれ定年まで学校長や会社役員などをしており、現在は地区社会福祉協議会会長や公民館館長などの立場で、地域住民参加の料理教室や体操教室などを主催している。これまでも 4 名の高齢者には、地域老年看護学実習において看護学生による人生観・健康観インタビューに協力をいただいていた経緯がある。その中で高齢者の死生観に触れる機会があり、学生の死生観構築の契機になると期待したことが協力者の選定理由である。

4. データ収集期間

平成 23 年 4 月から 9 月

5. データ収集方法

1) 事前アンケート

死生観インタビューの事前アンケートとして、インタビューガイドの「死後の世界はあると思うか」「死が怖いと思うか」「死はこの世の苦しみから解放されることだと思うか」「死について考えることを避けているか」「人生にはっきりとした使命と目的を見出しているか」「死とは何かについてよく考えるか」「人の寿命は見えない力によって決められていると思うか」の 7 項目について、自記式質問表に記載することを学生に求めた。「はい」「いいえ」の回答の他に、その内容や理由について自由記載とした。

2) 死生観インタビュー

- (1) 3 年次 4 月に行う「地域老年看護学実習 (10 時間)」の一環で実施した。実習内容は、① 地域で健康的に活動している高齢者への死生観インタビュー ② 後日、インタビュー対象者が主催している地域活動 (健康体操教室や料理教室など) への参加である。
- (2) 学生 3 ～ 4 名を 4 グループ編成し、それぞれ地域高齢者 1 名に入っていた。
- (3) 各演習室に分かれ、自己紹介の後、学生が地域高齢者に対しインタビューガイドに沿っ

て 60 分間の死生観インタビューを行った。
(4) 学生の中から 1 名のインタビューと 2 名の書記を決めた。録音はせず、書記は地域高齢者の語りをできるだけ語りのままに書き留めた。教員は倫理的配慮から控室で待機した。

(5) インタビューガイド

死生観インタビューには、平井、坂口、安部 (2000) が開発した臨老式死生観尺度 (7 因子 27 項目) を参考にインタビューガイドを作成した。臨老式死生観尺度は、主に死に対する価値観や態度を測定するもので、妥当性と信頼性の検証、再検査法による信頼性・基準関連妥当性・構成概念妥当性が確認されている。7 因子は、① 死後の世界観 ② 死への恐怖・不安 ③ 解放としての死 ④ 死からの回避 ⑤ 人生における目的意識 ⑥ 死への関心 ⑦ 寿命観である。

地域高齢者の体力および時間的観点から、27 項目全てのインタビューが困難であるため、各因子から質問が端的で意味の理解が容易と思われる一つの項目を抜粋して、以下の 7 項目をインタビューガイドとした。

<① 死後の世界観> から「死後の世界はあると思いますか」

<② 死への恐怖・不安> から「死が怖いと思いますか」

<③ 解放としての死> から「死はこの世の苦しみから解放されることだと思いますか」

<④ 死からの回避> から「死について考えることを避けていますか」

<⑤ 人生における目的意識> から「人生にはっきりとした使命と目的を見出していますか」

<⑥ 死への関心> から「死とは何かについてよく考えますか」

<⑦ 寿命観> から「人の寿命は見えない力によって決められていると思いますか」

それぞれの質問の「はい」に対する次の質問に「それはどのようなことですか」とし、「いいえ」に対する次の質問に「それは何故ですか」とした。

3) 学びのレポート

地域高齢者への死生観インタビュー後、「学生と地域高齢者の死生観の共通点と相違点は何か」というテーマで、グループ・全体討議を行った。討議後、4 名の地域高齢者の語りはすべての高齢者に共通しないことを学生に説明した。レポートには以下の 3 つを記述するよう学生に求めた。

- ① 学生と地域高齢者の死生観の共通点と相違点
- ② 地域高齢者の死生観をどう理解したか
- ③ 地域高齢者の死生観インタビューで得た学びをどう活用するか

6. データ分析方法

1) 事前アンケート

死生観インタビュー前の看護学生の死生観アンケートについて単純集計を行った。質問項目における自由記載については、内容を精読し質問項目ごとに分類した。

2) 学びのレポート

本研究の目的は、2年課程定時制の看護学生が、地域高齢者への死生観インタビューを通して高齢者の死生観をどう理解し、死生観インタビューで得た学びをどう活用するのかを明らかにする為、学びレポートの内容から、以下の2つを分析した。

- ① 地域高齢者の死生観に対する理解
- ② 地域高齢者の死生観インタビューで得た学びの活用

①②について、文脈単位を大切に切片化しコードを抽出した。分析結果の真実性を確保するために、意味内容のわかりにくい文章については、学生に口頭で確認を行った。抽出したコードについてトピックスごとに分類しサブカテゴリー、カテゴリーを形成した。

7. 倫理的配慮

人間総合科学大学倫理審査委員会の承認(第207号)を受け実施した。看護学生が在籍する教育機関の学校長、看護学生、市社会福祉協議会担当者および地域高齢者それぞれに対し、研究の目的と意義、研究方法、個人が特定されないよう記録類や論文の匿名性の確保、使用するパソコンやデータ類の管理や処理方法、プライバシーの保護や守秘義務、インタビューに際して配慮すること、さらに、研究参加に同意しない場合や途中で撤回した場合でも不利益を被らないこと、成績への影響がないこと、データの開示に応じることなど、対象者に生ずる可能性のある不利益や危険性に対する配慮について、文書および口頭で説明し、自由意思で署名による同意を求めた。看護学生に対する説明は、授業に影響のないホームルームの時間に行った。同意書の提出は、教員の目の届かない場所に設置した回収箱に入れるよう説明したが、その場で全員から提出があった。

V. 結果

1. 死生観インタビュー前の看護学生の死生観アンケート

学生14名から回答を得た。自由記載では125個のコードが抽出された。その主な内容を挙げる。

1) 死後の世界観

「死後の世界はあると思うか」については「はい」10名(71.4%)、「いいえ」が4名(28.6%)であった。「はい」の自由記載には「痛みや苦しみのないやさしい世界」「ずっと安らかな気持ちでいることができる世界」「いつも楽しいと思える世界」などがあつた。また「いいえ」では「死んだら何もなくなる」などがあつた。

2) 死への恐怖・不安

「死が怖いと思うか」の質問に対しては「はい」が12名(85.7%)、「いいえ」が2名(14.3%)であった。「はい」の自由記載には「死ぬ直前の痛みや苦しみの身体的な苦痛」「大切な人と逢えなくなり忘れられること」「自分という存在がこの世からなくなること」などがあつた。「いいえ」は「先に死んでいった家族や友人に逢える」「誰もが迎えること」があつた。

3) 解放としての死

「死はこの世の苦しみから解放されると思うか」では、「はい」が7名(50.0%)、「いいえ」が7名(50.0%)であった。「はい」の自由記載には「孤独・いじめ・貧困など精神的な苦しみからの解放」「災害や事件・重圧や責任感など社会的な苦しみからの解放」「ガンの痛みなど身体的な苦しみからの解放」などがあつた。「いいえ」は「苦しみは消えない、死後も苦しむことになる」「生きていることを苦しいと思わない」などがあつた。

4) 死からの回避

「死について考えることを避けているか」では「はい」が3名(21.4%)、「いいえ」が11名(78.6%)であった。「はい」の自由記載では「現在自分が健康だから考えられない」「考えると怖くなる」などがあつた。「いいえ」では「生きていれば必ず死が訪れ避けては通れないものだから」「一日一日を大事に生きるために必要」「看護師は死を意識する仕事のためきちんと考えることは大切」などがあつた。

5) 人生における目的意識

「人生にはっきりとした使命と目的を見出しているか」では「はい」が4名(28.6%)、「いいえ」が10名(71.4%)であった。「はい」の自由記

載では「今の置かれた状況で精一杯することが使命」「夢をかなえることが目的」などがあつた。「いいえ」では「今はぼんやり見え始め形成されつつある段階」「使命といえるほどのものはまだ見出していない」「先のことは予測がつかないし年齢を重ねるごとに目的は変わる」などがあつた。

6) 死への関心

「死とは何かについてよく考えるか」では「はい」が5名(35.7%)、「いいえ」が9名(64.3%)であった。「はい」の自由記載では「死は別れ、旅立ちである」「死は生のゴールである」「死を前にしたときどう生きていきたいかよく考える」などがあつた。「いいえ」では「年齢的に死が近いわけではないため死について考えることはない」「今を生きるのが精一杯のため考える余裕がない」「誰かの死に直面したときしか考えない」などがあつた。

7) 寿命観

「人の寿命は見えない力によって決められていると思うか」では「はい」が5名(35.7%)、「いいえ」が9名(64.3%)であった。「はい」の自由記載では最も多かったのが「生まれ持った運命」で、他には「神がいるとは思わないが何か大きな生命の輪のようなシステムはある」などがあつた。「いいえ」では「生活習慣などの見える力」「生き方や考え方などの見える力」「事故などの見えない力と見える力の両方ある」などがあつた。

2. 地域高齢者の死生観に対する理解

看護学生が死生観インタビューで地域高齢者の死生観をどのように理解したのかについて、学びレポートの記載内容から、2カテゴリーと7サブカテゴリー、26コードを抽出した。以下、抽出したカテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》、コードを「」で示す。

表1 地域高齢者の死生観に対する2年課程定時制看護学生の理解

カテゴリー(2)	サブカテゴリー(7)	コード(26)
生に対する価値観	今を生きる	<ul style="list-style-type: none"> ・死を考えるよりも人生をどう生きていくのが重要である ・生きることに執着が強い ・自己実現のために日々頑張っている ・やりたいことをする ・生きることが忙しい ・残りの人生を精一杯生きたい ・今を一生懸命に一日一日大切に生きれば死に出会っても驚かない
	悔いのない人生	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたいことやしなければならぬことが沢山残っている ・死によってできなくなることは困る ・生きている間に悔いのないように生きる ・心残りがないように過ごす
	人生の目的や使命	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のためではなく住民の方が中心の人生 ・住民の中に自分がいればよいという生き方 ・死が来るまで生きがいや目的をもって生きていこうという考え
死に対する価値観	死への関心	<ul style="list-style-type: none"> ・身内や友人の死を通して自分の死を考えるようになる ・死の準備をしなければならないと考えている ・死後の世界はあってほしい ・実際には死につながるが今の自分に起きていない ・死について考える暇がない
	死への恐怖・不安	<ul style="list-style-type: none"> ・死ぬことは怖くない ・死によって家族を困らせることが不安
	死の不可避	<ul style="list-style-type: none"> ・生きていけば必ず死は訪れる ・遅かれ早かれ死に直面する
	寿命観	<ul style="list-style-type: none"> ・死は運命である ・人生80歳まで生きたら100点満点である ・健康でピンピンコロリが理想的である

1) 【生に対する価値観】

学生は「死を考えるよりも人生をどう生きていくのが重要である」「生きることに執着が強い」「自己実現のために日々頑張っている」「やりたいことをする」「生きることが忙しい」「残りの人生を精一杯生きたい」「今を一生懸命に一日一日大切に生きれば死に出会っても驚かない」のように、高齢者の《今を生きる》を述べていた。また「やりたいことやしなければならぬことが沢山残っている」「死によってできなくなることは困る」「生きていながら悔いのないように生きる」「心残りがないように過ごす」のように、高齢者の《悔いのない人生》について述べた。さらに「自分のためではなく住民の方が中心の人生」「住民の中に自分がいればよいという生き方」「死が来るまで生きがいや目的をもって生きていこうという考え」から、高齢者の《人生の目的や使命》について述べていた。

2) 【死に対する価値観】

学生は「身内や友人の死を通して自分の死を考えるようになる」「死の準備をしなければなら

ないと考えている」「死後の世界はあってほしい」「実際には死につながるが今の自分に起きていない」「死について考える暇がない」のように、高齢者の《死への関心》について述べていた。また「死ぬことは怖くない」「死によって家族を困らせることが不安」のように、《死への恐怖・不安》について学生は述べた。さらに「生きていけば必ず死は訪れる」「遅かれ早かれ死に直面する」のように、高齢者の《死の不可避》について述べていた。加えて、学生は「死は運命である」「人生80歳まで生きたら100点満点である」「健康でピンピンコロリが理想的である」のように、高齢者の《寿命観》について述べていた。

3. 地域高齢者の死生観インタビューで得た学びの活用

看護学生が地域高齢者の死生観インタビューで得た学びをどう活用するかについて、学びレポートの内容から、2カテゴリと5サブカテゴリ、14コードを抽出した。以下、抽出したカテゴリを【】、サブカテゴリを《》、コードを「」で示す。

表2 2年課程定時制看護学生が地域高齢者の死生観インタビューで得た学びの活用

カテゴリ(2)	サブカテゴリ (5)	コード (14)
死生観の深化に活用	自己の死生観の深まり	・死生観を語る機会を持てたので自分自身の死生観を新たにしていける ・家族や友人などにも死生観について問いかける ・普段から様々な人の意見も聞いてなぜそう思うのか考える ・自分だけの考え方にとらわれないように他者の意見に耳を傾ける
	人生の目的や目標	・人生は一度しかないののでやりたいことをする ・常に目標を持ちながら楽しむ姿勢を忘れない ・目標を忘れずに目の前にある課題に精一杯取り組む
	人とのつながり	・価値観を広げ人との関わりを深める ・人とのつながりを大切にする
臨地実習に活用	高齢者の理解	・インタビューを通して高齢者に対するイメージが変化した ・高齢者は弱者ではないことを念頭に関わる ・高齢者の精神面の強さを持てる力として活かす
	死生観に対するアセスメントの実際	・健康な高齢者の死生観について実際に聴く機会がなかったが、話題にしてもよいことに気づいた ・臨地実習は疾病を抱えた人を受け持つので健康な人の死生観との違いを理解する

1) 【死生観の深化に活用】

学生は「死生観を語る機会を持てたので自分自身の死生観を新たにしていける」「家族や友人などにも死生観について問いかける」「普段から様々な人の意見も聞いてなぜそう思うのか考える」「自分だけの考え方にとらわれないように他

者の意見に耳を傾ける」のように、《自己の死生観の深まり》に活用すると述べた。また「人生は一度しかないののでやりたいことをする」「常に目標を持ちながら楽しむ姿勢を忘れない」「目標を忘れずに目の前にある課題に精一杯取り組む」のように、《人生の目的や目標》に活用すると述

べた。さらに学生は「価値観を広げ人との関わりを深める」「人とのつながりを大切にする」のように、《人とのつながり》に対して活用すると述べていた。

2) 【臨地実習に活用】

学生は「インタビューを通して高齢者に対するイメージが変化した」「高齢者は弱者ではないことを念頭に関わる」「高齢者の精神面の強さを持てる力として活かす」のように、《高齢者の理解》に活用すると述べていた。また「健康な高齢者の死生観について実際に聴く機会がなかったが、話題にしてもよいことに気づいた」「臨地実習は疾病を抱えた人を受け持つので健康な人の死生観との違いを理解する」のように、《死生観に対するアセスメントの実際》として活用すると述べていた。

VI. 考察

1. 死生観インタビュー前の看護学生の死生観

インタビュー前の学生の死生観で、割合が高かった回答は、「死後の世界がある (71. 4%)」「死が怖いと思う (85. 7%)」「死について考えることを避けていない (78. 6%)」「人生の使命を見出していない (71. 4%)」「死への関心がない (64. 3%)」「寿命は見えない力で決められているわけではない (64. 3%)」であった。また「死はこの世の苦しみから解放されることか」については肯定と否定がいずれも50%であった。

死後の世界観について学生は「痛みや苦しみのないやさしい世界」「ずっと安らかな気持ちでいることができる世界」など苦痛のない楽しい世界を想像していた。死への恐怖・不安についても死後の世界観と一致するように「痛みや苦しみの身体的苦痛」を挙げている学生が多かった。これについて、狩谷、渡會丹 (2011)、種市、熊倉、森田 (2016) の研究で、死への恐怖を示す学生の記述が最も多かったとする報告や、石田ら (2007)、梅田、迫田 (2014) の研究で、死後の世界観が最も多く、次いで死への恐怖・不安であったという報告がある。本研究でも、狩谷、渡會丹 (2011)、種市ら (2016) と同様、死への恐怖の割合が最も高く、恐怖の要因として、身体的苦痛や自己の存在や他者とのつながりの消滅が多かった。このように、看護学生にとって死への恐怖・不安が大きいことがまた本

研究において明らかとなった。

解放としての死について、学生はこの世の苦しみには精神的、社会的、身体的なものがあるとし、それらの苦痛から解放されたい人にとっては死によって解放されると考えている学生や、この世が苦しいと思っていなかったり、死後も苦しむと思ったり受け止め方は様々であった。さらに、死からの回避では、「生きていけば必ず死が訪れ避けては通れないもの」「一日一日を大事に生きるために必要」「看護師は死を意識する仕事のためきちんと考えることは大切」など、死について考えることを避けていないとしながらも、死への関心については、「年齢的に死が近いわけでないから考えることはない」など死についてあまり意識していないことが分かった。狩谷、渡會丹 (2011)、梅田、迫田 (2014) の研究で、約9割の学生が死について考えた経験が「よくある・ときどきある」との報告があるが、対象学生は4割にも満たなかった。これについてアルフォンス・デーケン (1996) は、私たちは恐怖や不安をただ否定的な感情として捉えることが多いが、死への恐怖には、生命の危険を回避させる機能や、創造性を育むといった積極的な役割を果たす側面もあると述べている。対象学生の記述にあるように、学生にとって死は、大切な人との別れや自己の存在がなくなることの恐怖・不安が大きい。しかし、学生は死をただ否定的に捉えているのではなく、生きることや看護師になる為に必要であるなど、死を考えることを肯定的に捉えていた。池澤 (2017) は、人間には潜在的、顕在的に死に対する恐れがあるため、死に関する思考は無意識のうちに抑圧されるのであり、宗教的な死後の靈魂といった考え方も死に対する恐れを低下させるものとして機能していると述べている。学生が「誰かの死に直面したときしか考えない」というように、常に死を意識しているわけではないことは極自然なことだと考えられる。だからこそ、学生が死生観について考えられる授業や実習の存在が重要だと考える。

次に、人生における目的意識で、「夢をかなえることが目的」だが「使命といえるほどのものは見出していない」という学生が多かった。「今は使命が形成されつつある段階」「自分らしく今を生きるしかない」と思いながら、具現化できていないことを学生は実感していた。これは、

死への回避での学生の考えと重なる。「一日一日を大事に生きる」ことが看護師という夢に近づく為「今の置かれた状況で精一杯することが使命」と学生は捉えていた。また寿命観については、運命など見えない力だけで決まるのではなく、生活習慣や生き方、遺伝子、医療の進歩など見える力も寿命に影響すると学生は考えていた。中原, 高口, 岩崎 (2017) の2年課程定時制看護学生を対象とした学習意欲の調査研究で、就労と勉学を両立する学生の特色として、就労による医療への好奇心や学校で得た知識を職場で活用できる環境にあり、社会経験は新たな自分への挑戦という自己実現の欲求に繋がったと報告している。また三木, 柳澤, 河村 (2010)、岡田, 服部 (2014) の報告によると、2年課程定時制看護学生は医療機関等への就業から社会的スキルが高く、日常的に他者から学ぶ経験も多いという。

対象学生も殆どが医療機関に所属しながら就学していた。置かれた社会環境は様々で、人生の使命についての考え方も異なるが、看護師という目的達成の生き方が人生の目的として学生の認識にあった。鎌田ら (2013)、小川ら (2017) の報告のように、学生のレディネスが多様化していることから死生観にもその特徴が表れていると思われた。例えば、就業先で看取りを体験することにより死生観を考える学生が多く、また死への恐怖・不安は少ないといったことである。しかし実際は、死についてよく考えると回答した学生が少なく、死への恐怖・不安を感じている学生は多いことから、2年課程定時制という就業の特徴があるとは言えない。また、死についてよく考えるかという質問の「よく考える」の捉え方の違いが結果に影響したと思われる。人は常に死を意識しているわけではない為、「よく」の度合いについて具体的に学生に示す必要があった。今回の調査では学生の背景を把握できておらず、十分に考察できない点は今後の課題とする。

しかし、学生に死生観について事前に回答してもらったことは、自己の考えを洞察しインタビューによる高齢者の死生観を理解する足掛かりになったと考える。

2. 地域高齢者の死生観に対する理解

学生が、地域高齢者への死生観インタビューで、高齢者の死生観の理解について記述した 26

コードのうち、生に対する価値観のコード数が14、死に対する価値観のコード数が12と数には殆ど差がない。今回の研究では、インタビュー後の学生の死生観を調査しておらず、死への恐怖・不安や死への関心などがどう変化したのか比較ができない。しかし、学生の記述からは、【生に対する価値観】や【死に対する価値観】が偏りなく抽出され、学生は地域高齢者の死生観を理解したと考えられる。

学生が記述した「死が来るまで生きがいをもって生きる」「生きていれば必ず死が訪れる」からは、生と死に対する価値観について学生の理解が分離していないことがわかる。これについて眞鍋ら (2017) は、死生観は死の否定的な側面だけを見るのではなく、死を意識することによってよりよく生きるという肯定的な側面が含まれると報告している。死は生の延長線上にあり、「死が不可避」だからこそ《今を生きる》地域高齢者の死生観を学生は理解したと考えられる。しかし学生は《死への関心》の「死の準備をしなければならないと考えている」のように、死を考えることを肯定している高齢者がいる一方で、「死につながるものが今の自分に起きていない」など現実的な自己の死を認識していない高齢者がいることも記述している。また《死への恐怖・不安》も対極的な記述があった。これは、それぞれ地域高齢者の異なった死生観によるものと思われる。学生の死生観の構築に重要なことは、看護の対象であるその人の人生の歴史を知り、生き方や逝き方の考えに関心を持つことだと考える。長江 (2016) も、その人の人生に関心を寄せ、その人の生活と必要な医療・ケアを結び付けていく看護の重要性を述べている。木下ら (2013) も、インタビュー体験によって、学生が自分とは異なる多様な死生観を持っていることについて実感をもって理解できると報告している。今回学生が高齢者の多様な死生観を知ること、個別的な看護の必要性の理解にも繋がったと考えられる。

またインタビューだけでなく、討議やクラス全体の発表を通して4名の地域高齢者の異なった死生観を共有したことにも意味があった。これについて瀬川, 原 (2005) は、自分の体験を他のメンバーと共有することで終末期という限られた状況で一人の患者からは学べないことが理解できると報告している。学生が高齢者の

多様な死生観を理解する上でインタビューやグループ討議、全体発表は必要であったと考えられる。しかし今回の研究は学習方法に焦点を当てておらず、討議や発表による学習効果の違いが言及できていないため、今後の課題としたい。

さらに学生の記述に「自分のためではなく住民の方が中心の人生」など住民中心の《人生の目的や使命》がある。これは、インタビューした高齢者が定年退職から現在まで積極的に地域活動を主催する方々であったことが影響している。今後はインタビュー協力者を広げることも課題としたい。

3. 地域高齢者の死生観インタビューで得た学びの活用

【死生観の深化に活用】では、「家族や友人などにも死生観について問いかける」など《自己の死生観の深まり》に活用するとあった。特に「自分だけの考え方にとらわれないよう他者の意見に耳を傾ける」からは、インタビュー後、何度も討議を行って他学生の考えを聴いたり、地域高齢者の死生観を全体で共有したりしたことで、多様な価値観の学びに繋がったと考える。さらに、周囲の人にも死生観について問いかけることを学生が挙げたのは、今回の経験によって死生観を構築する重要性を学生が実感できたからだと考えられる。加えて《人とのつながり》《人生の目的や使命》からは、学生が高齢者の地域貢献活動に影響を受けていると考えられる。これについて、インタビュー前の学生のアンケートで「使命といえるものはまだ見出していない」とする学生の意見が7割を占めていたが、今回はそういった否定意見がなかったことから言える。学生は看護師になるという目標に向かって楽しみながら努力することの重要性を実感したと考えられる。しかし、死生観インタビュー後のアンケートを実施しておらず、個々の学生の死生観の変化について言及できない点は今後の課題とする。

【臨地実習に活用】では、「高齢者は弱者ではないことを念頭に関わる」「精神面の強さを持つ力として活かす」など、臨地実習において《高齢者の理解》に活用するとあった。また「死生観を話題にしてもよいことに気づいた」「疾病を抱えた人を受け持つので健康な人との死生観の違いを理解する」からは、学生がインタビューで対話の実際を体験し方法が理解できたことや、話

題にすることの躊躇いが軽減したことが伺える。

学生にとって他者の死生観を聴く機会はあまりない。山本 (2007) は、その人が体験したこと、見聞したこと、模倣的に生きそして死んでいった実例が最も関心が高く与える影響も大きいと述べている。また前述したように、臨地実習、授業やカンファレンス、DVDや映画鑑賞、インタビューなど、死について考える経験が死生観に影響したとする研究報告が数多くある。中でも家族インタビューを取り入れた研究で、寺門ら (2002) は、個人史を傾聴する中で相互作用が生まれることによって、年齢差や世代間ギャップをこえて歴史をもつその人を理解すると述べている。本研究においても、2年課程定時制看護学生が高齢者への死生観インタビューで、高齢者の死生観の理解とともに、関心を持って自己の死生観を考え深める機会になったこと、そして死生観インタビューで得た学びを臨地実習に活かそうとしていることが分かった。今後、死生観インタビューの学びの活用について、看護大学生や3年課程看護学生にも調査し検討していきたい。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、教育の平等性や高齢者への配慮という倫理的な観点から、対象学生を少人数に分けて4名の高齢者に死生観インタビューを求めた。しかし、それぞれの高齢者の死生観に違いがあり全体で共有するのに時間を要した。また協力いただいた高齢者は、現在も地域貢献活動をしている方ばかりであったこと、学生14名のデータであったことなど結果の汎用性が高いとは言えない。さらに学生の看取り経験の有無、インタビュー後の学生の死生観の変化について言及できていない。今後の課題として、研究協力者である高齢者の選定と対象学生数を増やすこと、就業と看取り経験と死生観の関連性、インタビュー以外の討議や全体発表など学習プロセスの成果、インタビュー前後の学生の死生観について比較検討、看護大学生や3年課程看護学生が考える死生観の活用について検討していきたい。

VII. 結論

2年課程定時制看護学生は、地域高齢者への死生観インタビューを通して、高齢者の《今を

生きる》《悔いのない人生》《人生の目的や使命》などの【生に対する価値観】と、《死への関心》《死への恐怖・不安》《死の不可避》《寿命観》などの【死に対する価値観】を理解した。また、2年課程定時制看護学生は、地域高齢者の死生観インタビューで得た学びを《自己の死生観の深まり》《人生の目的や目標》《人とのつながり》のように自己の【死生観の深化に活用】し、《高齢者の理解》《死生観に対するアセスメントの実際》など【臨地実習に活用】することが本研究において示唆された。

謝辞

お忙しい中ご協力いただきました地域高齢者の皆様、対象学生の皆様に深謝致します。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- アルフォンス・デーケン .(1996). 死とどう向き合うか (p.155). 日本放送出版協会 .
- 古川久美子, 岡崎美智子 .(2013). 看護学生の死生観を変容させる臨地実習でのカンファレンスの一考察. 日本看護福祉学会誌, 19(1), 31-47.
- 原広美 .(2015). 看護学生の死生観と望ましい死および学習経験との関連. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 教員教育担当者養成課程看護コース, 40, 47-54.
- 早坂寿美 .(2012). 看護学生の死生観と他者意識—臨地実習前後の比較—. 北海道文教大学紀要, 36, 165-172.
- 平井啓, 坂口幸弘, 安部幸志 .(2000). 死生観に関する研究 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. 死の臨床, 23(1), 71-76.
- 池澤優 .(2017).1 死生学とは何か. 清水哲郎, 会田薫子 (編), 医療・介護のための死生学入門 (p.8). 東京大学出版会 .
- 石田順子, 石田和子, 神田清子 .(2007). 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要, 18, 109-115.
- 木下みゆき, 竹元仁美, 齊田菜穂子, 渡邊則子, 牧香里 .(2013). 家族へのインタビューがもたらす看護学生の死生観の深まり がん告知希望の有無を通して. 聖マリア学院大学紀要, 4, 77-82.

- 鎌田由美子, 松田安弘, 山下暢子 .(2013). 教員による2年課程看護専門学校学生のレディネスの把握に関する研究—看護学実習における教授活動に焦点を当てて—. 群馬バース大学紀要, 15(別刷), 9-22.
- 狩谷恭子, 渡會丹和子 .(2011). 看護大学生における死生観と死に対するイメージの学年比較. 医療保健学研究, 2, 107-116.
- 粉川妙子 .(2013). 看護学生への『いのちの教育』の実践とその評価: 情意領域に焦点をあてた授業の試み. 東北文化学園大学看護学科紀要, 2, 37-44.
- 厚生労働省 .(2018). 第1回看護基礎教育検討会資料 1. 看護基礎教育検討会開催要綱. <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-oumuka/0000203413.pdf>(平成30年4月12日)
- 厚生労働省 .(2018). 第2回看護基礎教育検討会 参考資料 2. 第1回看護基礎教育検討会における意見, 2-3. <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000207646.pdf>(平成30年5月21日)
- 眞鍋知子, 天谷尚子, 陳俊霞, 山下菜穂子 .(2017). 看護学生と社会人の死生観の比較, 了徳寺大学研究紀要, 11, 87-96.
- 三木隆子, 柳澤眞由美, 河村恵里子 .(2010).2年課程定時制看護専門学校生の社会的スキルと領域看護学実習における学習活動の関連, 看護教育, 41, 170-173.
- 中原和美, 高口三千世, 岩崎真理 .(2017).2年課程の看護学生における学習意欲の実態調査から見えてきた学習支援の視点. 日本医療マネジメント学会雑誌, 18, 244.
- 長江弘子 .(2016). 看護実践にいかすエンド・オブ・ライフケア (p.9). 日本看護協会出版会 .
- 小川美恵, 上田伊佐子, 森田敏子 .(2017). 看護師養成所2年課程の教育制度の歴史的変遷と教育課題—准看護師の誕生から准看護師を看護師にするための教育の取り組み—. 徳島文理大学紀要, 94, 151-159.
- 奥山益朗 .(1997). 死にまつわる日本語辞典 (p.111). 東京堂出版 .
- 岡田摩理, 服部律子 .(2014).2年課程の看護学生の学びの特徴—思考力を高めるための試行的な授業における学生の反応から—. 岐阜県立看護大学紀要, 14, 37-48.

- 岡本双美子, 石井京子 .(2005). 看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析. 日本看護研究学会雑誌, 28(4), 53-60.
- 瀬川睦子, 原頼子 .(2005). 終末期看護実習における死生観構築と共感性育成の効果的指導. 川崎医療福祉学会誌, 15(1), 141-147.
- 種市ひろみ, 熊倉みつ子, 森田圭子 .(2016). 在宅看取りを体験した介護者の講演聴講による看護学生への影響について—死生観, ターミナルケアに対する態度に焦点を当てて—. 日本地域看護学会誌, 19(2), 40-48.
- 寺門とも子, 大塚邦子, 石松直子, 平川オリエ .(2002). 高齢者理解のための効果的な学習方法—看護学生の個人史インタビューによる人生観・健康観の学び—. 老年看護学, vol.7, No1, 88-94.
- 梅田尚子, 迫田智子 .(2014). 終末期看護の授業と実習が看護学生の死生観に及ぼす影響. 日本看護学会論文集 看護教育, 44, 34-37.
- 山本俊一 .(2007). 死生学のすすめ (p.111). 医学書院 .